

令和6年  
2024年

# 7月

日	月	火	水	木	金	土
	1 赤口 半夏生 三りんぼう とら	2 先勝 う	3 友引 たつ	4 先負 一粒万倍日 み	5 仏滅 一粒万倍日 うま	6 赤口 小暑 ひつじ
7 先勝 七夕 さる	8 友引 一粒万倍日 とり	9 先負 いぬ	10 仏滅 る	11 大安 ね	12 赤口 うし	13 先勝 とら
14 友引 う	15 先負 ●海の日 たつ	16 仏滅 み	17 大安 一粒万倍日 三りんぼう うま	18 赤口 ひつじ	19 先勝 土用 さる	20 友引 一粒万倍日 とり
21 先負 いぬ	22 仏滅 大暑 る	23 大安 ね	24 赤口 土用の丑 うし	25 先勝 とら	26 友引 う	27 先負 たつ
28 仏滅 み	29 大安 一粒万倍日 三りんぼう うま	30 赤口 明治天皇祭 ひつじ	31 先勝 さる			

# 文月

〔ふみづき〕 令和6年7月

旧暦では秋と言われておりましたので、夜が長くなるから読書に適しているという意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

ものごとにおおる心を祓ひみば

いづれの神か障りあるべき

ト部兼好・百首歌抄

## 今月のごとば

ものごとにおおる心を祓ひみば

いづれの神か障りあるべき

ト部兼好・百首歌抄

「祓」とは、まづ人が「俺が、俺が」といふ「我」を祓ひ去ることにつきます。

世にもろもろの祟り・障りがあるとすれば、それは自分の不遜・傲慢さが廻り廻つて、自分に還り来たものに外ならない。

だからあらゆる事柄に対して、傲慢・不遜の心を以て、相対することをやめ、清浄・正直な心を以て、相対し得るならば、いかなる神にしても、私共に障害を与へる神があるであろうか。

障害のない人生を獲得する唯一の道は、自分の傲慢・不遜の心を取り去り、謙虚な心、我を無にした心を持つ以外にない。

(神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋)

## 季節のまつり

七夕 七月七日  
日本と中国の伝説の合作

七月七日は「七夕」の節供といわれ、日本に古くから伝わる棚織津女《年に一度水辺のはた屋で神様の訪れを待ち、神様とともに一夜を過ごす聖なる乙女》の信仰と中国の牽牛と織女の星伝説とが結び付いた行事です。江戸時代には、手習い(習字)が上手になるようにとの願いから寺子屋などでさかんに行なわれ、願い事を短冊に書き、笹竹に結びつけて七夕祭りを行いました。



## 中元

七月十五日  
本来は、祖先・両親への感謝の祭り

お中元とは、中元(旧暦七月十五日)の時期に行なう贈答を言います。古くから中元には、先祖の霊と両親などの生身魂を祭る行事があり、この日は嫁いだ娘や分家した息子たちが帰ってきて祖先に感謝し、両親に魚などを贈るといふ習慣がありました。江戸時代になると商業が発達し、当時の商取引では盆と大晦日に集金してしましたので、この時期になると商人は、顧客にお礼の品を配りました。それが一般の人にも広がって、日頃お世話になっていている人への夏の挨拶として、品物を贈る習慣が定着しました。

## 二十四節気

【小暑 しょうしよ】…六日

旧暦六月末の月の正節で、夏至を境に日脚は徐々にたまってきていますが、暑さは日増しに加わってきます。

【大暑 たいしよ】…二十二日

旧暦六月末の月の中気で、このころは暑さもますます加わり、酷暑にさいなまれます。夏の土用はこの節気に入ります。

## 六曜・選日

《六曜》  
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし  
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む  
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉  
【仏滅】…万事凶、患えは長びくおそれあり  
【大安】…何事をするのにも吉日、大吉日  
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉  
《選日の吉凶》  
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大吉日  
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始  
婚姻は吉、借る、離別凶

## 七十二候《7月》

大暑 小暑

初候・桐始結花(きりはじめてはなをむす) 桐の花を咲かせぬ  
次候・土潤溽暑(つちうるせき) 土が潤い、暑さが増す  
末候・大雨時行(おおいあめときり) 大雨の降る時  
初候・温風至(あつかせいたの) 注ぐ陽がだんだんと強くなる  
次候・運始開(はきははじめつひら) 運がゆるくなり花を咲かす  
末候・鷹乃学習(たかすなわかれがく) 鷹が巣立ちの準備をする  
又立や本風などの夏の雨が激しく降り

安産祈願 7月の戌の日  
9日(火)  
21日(日)  
\*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《15日 海の日》  
海の恩恵に感謝するとともに、海洋国日本の繁栄を願う日です。  
祝祭日には国旗を掲げましょう

何気なく使っている「数」

洋の東西を問わず、「七」は聖なる数として考えられてきました。西洋では旧約聖書の創世記に神が六日間で天地を創造し、七日目を安息日として聖なる日と決めました。東洋でも農作業の時期を計るための天文学が発達し、北極星と北斗七星を季節を知る指標としていました。また、月の運行は七日ごとに様相を変えていきます。細い三日月が七日たつと半月形の上弦の月となり、また七日たつと満月になります。さらに七日たつと下弦の月となり、それから七日で真つ暗な新月となります。古代の人々は、この月の変化の時をとらえる尺度とし、暦の基準としました。そこから「七」は特別な数字と考えられるようになり、生後七日目にお七夜の誕生祝を行ったり、法要も七日を単位として行うようになりました。さらに「七福神」「七賢人」など、個性あるものをまとめる数詞としても使われています。

## 万能一心

たくさんの才能に恵まれていても、向上・努力する心がなければ物事は成就しない。



水蓮

参考文献 『くらしと祭り百話』小野迪夫(神社新報社) 『日本人数のしきたり』飯倉晴武(青春出版社)